“FDIC のファーストリパブリックの監督”報告書の概要

目次

Ⅰ.はじめに

Ⅱ．ファーストリパブリックの主な特徴、破綻に至った要因
1．富裕層取引に注力したビジネス戦略、資産と預金が集中
2．金利リスクを十分に削減していなかった

Ⅲ．ファーストリパブリックの金利リスクモニタリング
1．金利リスクモニタリングの枠組みと運営状況
2．金利リスク削減の選択肢の可能性
3．SVB と SBNY での大幅な預金流出が伝播

Ⅳ．ファーストリパブリックの検査、監督（1）～CAMEL 格付け、市場リスクへの感応性
1．ファーストリパブリックの CAMEL 格付け、検査勧告
2．FDIC による“市場リスクへの感応性”要素の評価

Ⅴ．ファーストリパブリックの検査、監督（2）～流動性リスク管理、経営の評価
1．FDIC による“流動性”要素の評価
2．FDIC による“経営”要素の評価
3．LIDI プログラムでのファーストリパブリックの格付け

Ⅵ．継続的な検査プロセス、計画と成果物、結果の伝達、人員の確保状況

Ⅶ．報告書の結論とさらに検討すべき事項

2023 年 12 月 25 日

佐志田晶夫
（公益財団法人　日本証券経済研究所）

“FDIC のファーストリパブリックの監督”報告書の概要

要約

本稿では、FDIC が 9 月に公表した“FDIC のファーストリパブリックバンクの監督”報告書の概要を紹介する。同行は 1985 年にカリフォルニア州で設立され、富裕層とその事業向けの金融サービス提供で業績を上げ、貸出を主とした資産と預金を拡大してきた。だが、2023 年 3 月の SVB とシグネチャーバンクの破綻が波及し、保険対象外預金への資金調達依存度の高さや固定金利ローンの未実現損失の大きさが懸念され、預金がかなり流出した。大手米銀のコンソーシアムから 300 億ドルの預金を受入れるなどによって立て直しを図ったのだが預金流出が再燃し、州の規制当局が 5 月 1 日に破綻処理を決めた。

同行のビジネスモデルは富裕層顧客への注力を特色としており、貸出取引をベースにプライベートバンキング、ビジネスバンキング、ウェルスマネジメントなどのサービスを提供してリレーションシップの構築に努めていた。同行は、CAMEL 総合格付けが 2、資産内容や経営の要素は 1 と評価されるなど FDIC からの評価は高かった。FDIC の検査担当者は、同行の企業文化やガバナンスを評価し、検査での指摘への対応なども迅速だとしていた。

同行の金利リスク管理戦略は、継続的な成長と各時点の水準での金利の改訂に依存するもので、大口預金による低コスト調達で資金利ザヤを確保して収益を上げていた。だが、2022 年には固定金利貸出の増加が続く一方、預金は伸び悩み有利子預金へシフトしていた。同行は NII(資金利益)と EVE（純資産の経済価値）で金利リスクを管理していたが、EVE のリスクトレランス／アペタイト抵触に直ちに対応せず、当局も改善を促していなかった。

同行は、富裕層顧客への金融サービス提供及びリレーションシップの構築で大口預金の安定性を確保しようとしていた。経営陣は KRI やリスクダッシュボードで流動性リスクを監視し、顧客からの評価を確認、流動性ストレステストも実施していた。だが、SVB などでの急速かつ大幅な預金流出が波及し、保険対象外預金に依存するリスクが顕在化した。監督当局は、保険対象外預金での調達比率が高い銀行への検査ガイドを強化する必要がある。

ファーストリパブリックの経営は、一貫したビジネスモデルや企業文化、ガバナンスなどが評価されていたが、金利上昇によって金利リスクや保険対象外預金への依存に対する懸念が高まり、環境変化への経営陣の対応は遅れた。当局がこうしたリスクについて追加的に検討していれば、経営格付けの引下げを選択したと考えられる。FDIC の内部レビューチームは、金利リスクや流動性リスク管理に関する問題提起をするといった当局の行動で同行の破綻が避けられたかは分からないが、脆弱性は抑えられただろうとしている。また、大手銀行の状況に関する情報の共有やリアルタイムモニタリングの強化などを提言している。

“FDIC のファーストリパブリックの監督”報告書の概要

公益財団法人日本証券経済研究所
特任リサーチ・フェロー　佐志田晶夫

Ⅰ．はじめに

本稿では、FDIC が 9 月に公表した“FDIC のファーストリパブリックバンクの監督”報告書(1)の概要を紹介したい。同行は資産規模が 2 千億ドルを越えて米国内 14 位の規模であり、資金調達面では預金保険対象外の預金にかなり依存していた。このため同様に保険対象外の大口預金に依存していた SVB（シリコンバレーバンク）、SBNY（シグネチャーバンク）が破綻した影響を受けて大口預金が流出し、大手米銀 11 行のコンソーシアムからの 300 億ドルの預金受入れなどによって立て直しを図ったが、固定金利貸出（住宅ローンなど）の未実現損の大きさなど財務状況が懸念されて預金流出が再燃し、5 月 1 日に破綻にした。

図表1：ファーストリパブリックの財務情報（10億ドル、(%)）

	2018年末	2019年末	2020年末	2021年末	2022年末	2023年3月末
総資産	99.2	116.3	142.5	181.1	212.6	232.9
現金、預け金	2.8	1.7	5.1	12.9	4.3	13.2
総貸出	75.9	90.8	112.6	135.0	166.9	173.3
総預金	79.1	90.1	114.9	156.3	176.4	104.5
保険対象外預金	51.7	59.0	80.3	116.7	119.5	50.8
対総資産(%)	52%	51%	56%	64%	56%	22%
対総預金(%)	65%	65%	70%	75%	68%	49%

〔出所〕FDIC："FDIC’s Supervision of First Republic Bank", September 2023, Table1より

FDIC の報告書は、ファーストリパブリックの経営、ビジネス戦略、リスク管理を概観し、FDIC が検査・監督で同行をどう評価したかを内部チームがレビューして課題を整理したものである。資金調達面での保険対象外預金への依存に関する指摘は、FRB が SVB、FDIC が SBNY についてまとめた報告書と(2)共通する。ただし、ファーストリパブリックでは、SVB などとは異なり検査の人員確保での問題はなかったようだ。また、報告書は、顧客とのリレーションシップ重視などの同行の経営方針やリスク管理に対する FDIC の評価が相対的に高かったことを指摘し、後知恵での批判は抑えて改善策を検討している。

同行は低金利環境で富裕層向け貸出（住宅ローンなど）を拡大してきたが、金融引締めによる金利上昇で未実現損が増大して財務状態が脆弱化、SVB などで起きた急速な預金流出が波及し、顧客とのリレーションシップでは大口預金が維持できなくなった。ビジネス環境変化に対処しきれなかったのだが、報告書は当局側の認識や対応の遅れも指摘している。

---

1 FDIC：“FDIC’s Supervision of First Republic Bank” September, 2023 を参照。
2 SVB と SBNY については、拙稿：“SVB（シリコンバレーバンク）の破綻と FRB の監督・規制～FRB によるレビューの概要”2023 年 6 月、当研究所トピックスと“FDIC によるシグネチャーバンク（SBNY）の監督に関する報告書の概要”2023 年 6 月、当研究所トピックスで、それぞれを紹介している。

Ⅱ．ファーストリパブリックの主な特徴、破綻に至った要因

1．富裕層取引に注力したビジネス戦略、資産と預金が集中

ファーストリパブリックは 1985 年にカリフォルニア州で設立され、富裕層向け業務（住宅ローン、プライベートバンキング、ビジネスバンキング、ウェルスマネジメントなど）に注力し、米国の主要都市（サンフランシスコ、ニューヨークなど）に拠点があった。

同行は、顧客との貸出関係をベースに他のサービスを提供して包括的なリレーションを構築し、優れたサービスを提供していた。典型的な顧客は、教育水準が高い、都市部在住、沿岸域の富裕層（投資資産 1 千万ドル以上）だった。顧客（消費者と企業）とのリレーションで集めた預金は、安定的で低コストだった。企業文化とビジネスモデルは一貫し、富裕層とその事業とのリレーションに基づいて、各個人に合わせたサービスを提供していた。

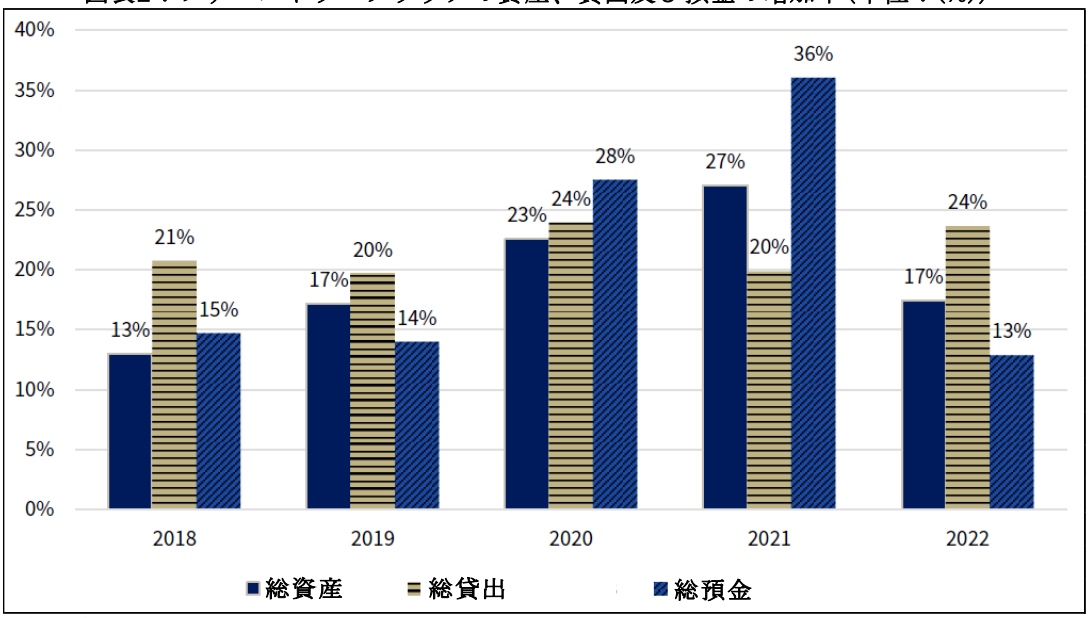
FDIC の検査結果は、同行の経営と業務運営の一貫性を評価し、顧客減耗率はかなり低く、顧客の満足度は競合他行の平均より高かった。多様で経験を積んだ職員は起業家精神で顧客のニーズに応え、個別化されたサービスを提供していた。また、包括的な職員のインセンティブ構造は、長期的な預金の増加やリレーションシップ構築、他の職員との協調を評価し、懲罰的なクローバック条項が、厳格な信用の質と倫理的なビジネス慣行を促していた。

今回の報告書で内部チームがレビューの対象とした 2018 年から 2022 年の間、同行の経営は“強固：strong”、銀行全般は“満足:satisfactory”と評価されていた。FDIC の検査官は、同行の経営陣は、監督のフィードバックと検査勧告への対応が早く指摘事項の修正は迅速で共に仕事がしやすかったとしている。また、同行の取締役会と経営陣はインフラと統制、リスク管理プロセスを銀行の成長とリスク特性に応じて導入・維持したと評価されていた。

だが、2023 年 3 月に SVB と SBNY が破綻するとファーストリパブリックへの市場と預金者からの信頼が失われ、預金保険対象外の預金が大幅に流出し、5 月 1 日にカリフォルニア州当局に破綻処理されるに至った。資産、預金と貸出の成長、資金調達面での集中、資産の未実現損失、保険対象外預金への過度の依存、金利リスク削減の失敗など、同行のビジネスモデルと経営戦略の特性が、SVB などの破綻の伝播への脆弱性を生んだと考えられる。

ファーストリパブリックは、2018 年から 22 年の平均増加率が総資産は 21%、貸出 22%で、比較対象の他行は 2019 年から 2022 年に総資産 11%、貸出 9%の増加だった。2022 年に他行は伸びが鈍化したが、同行は貸出が 23.6%、預金は 12.9%増加した。ただし、預金の増加率は 2022 年を通じて鈍化した。同行は資産と資金調達が集中しそのリスクの特質が共通するため、類似の経済、金融などのリスク要因への感応性が高く、資産の質、収益、資本が一つまたは地域限定の経済事象や市場状況で過度に影響されるようになっていた。

図表2：ファーストリパブリックの資産、貸出及び預金の増加率（単位：(%)）



〔出所〕FDIC："FDIC's Supervision of First Republic Bank", September 2023, Figure1より

資金調達が集中していると、資金を急に置き換えるか不利な条件で変更が求められるリスクがある。銀行や資金提供者の状況が悪化すればリスクが高まり、資金の利用可能性が大きく減少しかねず、銀行の経営陣が計画と方針を策定する際に検討すべきリスクが加わる。リスクを削減するには、資金調達源と市場状況との関係を検討し、短期、中期及び長期の様々な資金源を利用可能にすることが有益である。取締役会には、資金調達多様化の方針のガイドラインとリミットで、銀行のリスクトレランスを設定し明示する責任がある。

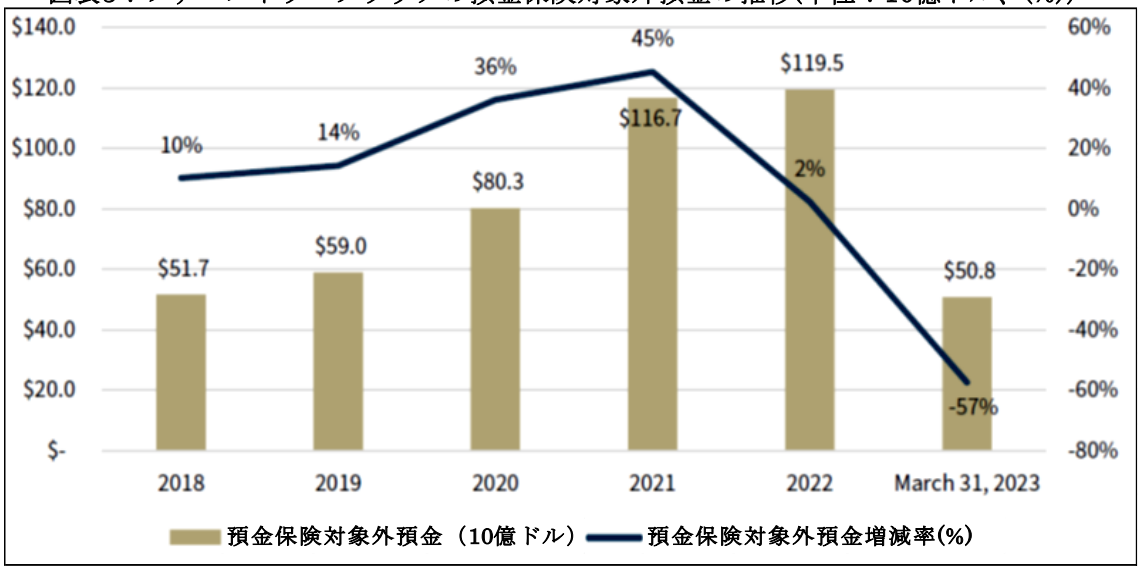
FDIC の 2021 年の検査報告書（ROE）は、ファーストリパブリックの戸建て（SFR）住宅ローン残高は 792 億ドルで貸出の約 61%、Tier1 資本+貸倒引当金の 485%に相当するとしていた。ただし、集中に伴うリスクは適切に管理されているとした。また、同行の 2021 年アニュアルレポートによれば、戸建て住宅ローンの 61%は利払いのみのローンだった。

低金利の継続によりファーストリパブリックの借手は長期の低金利貸出を選好していた。2022 年 12 月の OMR（継続モニタリング報告書）によれば、2016 年以降に借手は当初 5 年間据え置き変動金利住宅ローンから長期ローンにシフトし、2021 年 12 月には 30 年固定金利ローンと当初 10 年間据え置き変動金利ローンが、新規戸建て住宅ローンの 75%を占めた。既存顧客も低金利で長期の住宅ローンに借り換え、2020 年、2021 年には借換えが戸建て住宅ローン組成の過半数を占めた。金利上昇で、2022 年は借換えが減少に転じた。

ファーストリパブリックは保険対象外預金にかなり依存していた。FDIC の検査方針のリスク管理マニュアル（Risk Management Manual of Examination Policies）は、25 万ドル超の預金関係は金融機関が良好な状態なら安定的でも、財務上の問題が生じれば安定的で

なくなるかもしれないとしており、ストレス時には信頼できる資金調達源ではないかもしれなかった。2018 年から 2022 年の間、同行の保険対象外預金の対総資産比率は 51%から 64%だったが、GAO の報告書によれば、競合他行グループの中央値は 31%から 41%だった。ファーストリパブリックの保険対象外預金の残高は 2019 年末から 2021 年末の間で 2 倍近くに増え、リレーションシップ・ビジネスモデルと優れたサービスが富裕層顧客を引きつけ続けていた。検査結果報告書によれば、保険対象外預金は多様化しており、検査官はその性質は安定的だとみていた。例えば、高金利預金は 2021 年末で総預金の 1%未満だった。

図表3：ファーストリパブリックの預金保険対象外預金の推移(単位：10億ドル、(%))



〔出所〕FDIC："FDIC's Supervision of First Republic Bank", September 2023, Figure2より

同行は、大口及び保険対象外預金口座の安定性を KRI（主要リスク指標）、リスクダッシュボードと大口預金者と銀行エグゼクティブとのコミュニケーションに焦点を当てた顧客エンゲージメントイニシアティブでモニタリングしていた。ダッシュボードは、経営陣に預金の安定性の包括的な分析を四半期毎に提供していた。また、同行は顧客のロイヤリティを測るためネットプロモータースコア（NPS）調査を使用していたが、2021 年検査報告書は、2021 年の NPS は前年より 5%以上増えて米国銀行界の平均の 2 倍だったとしていた。経営陣は、預金者はロイヤリティがあり預金の取付けの可能性は極めて低いと信じていた。

2．金利リスクを十分に削減していなかった

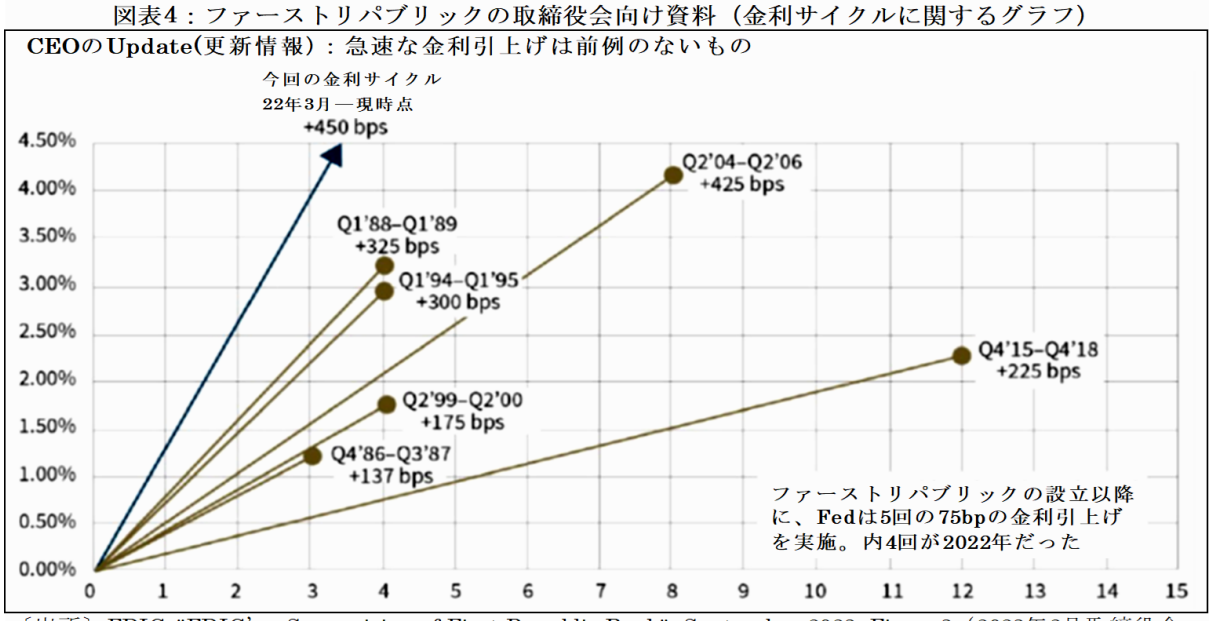
戸建て（SFR）住宅ローンや他の不動産担保ローンを専門職、企業経営者や起業家向けに組成するという同行のビジネスモデルは、低金利環境ではうまくいったが、適切な金利リスク削減措置が行われていなかった。FDIC 当局者は、貸出の約 50%が各時点の実勢金利で金利変更されていたとしている。毎年約 30%の変動金利ローンが金利変更され、ローンポートフォリオの約 20%の新規貸出を実勢金利で組成していた。同行は既存顧客とのリレーションシップ拡大や新規顧客獲得によるコア預金の成長に焦点を当て、多くの顧客が無利子の決済預金口座を保有しており、低コストの資金調達で低金利ローンの組成が可能だった。

同行の 2022 年 3 月の投資家向けプレゼンテーション資料では、“資産成長率と安定的で大きな決済預金口座基盤（68%）とかなりのローン返済率が、金利上昇への防御と収益増をもたらす”とし、負債の 73%が金利に非感応的で 2019 年から 2021 年の間では平均で総貸出の 53%がその時点の市場金利に変更されたとしていた。だが、FRB が 2022 年 3 月に利上げを開始すると、資産／負債のミスマッチが生じた。資産は長期のローンに集中して低金利収入だったが預金は短期だった。また、2022 年 9 月以降、顧客は無利子預金口座から定期預金／CD 口座へ預金を移し始め、利払い増加で純金利鞘（NIM）が圧縮された。

同行のローン組成は、2022 年の第 1 四半期と第 2 四半期には増加し 178 億ドルと 220 億ドルだったが、第 3 四半期は 180 億ドル、第 4 四半期には 156 億ドルに減少した。2023 年 4 月に検査官は 2022 年 1 月から 2023 年 3 月の金利シートを分析して、短期の住宅ローンを魅力的にするように金利が調整されてはいたが、顧客は固定金利ローンを選好し続け、経営陣はローンの増加を抑えるのに十分な金利の変更をしていなかったと指摘している。

FDIC 当局者によれば、資産／負債の不均衡はファーストリパブリックに特有ではなく、多くの銀行が金利上昇のレベルと速さや逆イールド化を予期していなかった。同行は 2023 年に金利上昇の収益への圧力をトップリスクの一つだと認識し、2 月の取締役会では、銀行が直面する課題として、決済口座からの移動、預金金利の設定と競争、ローン需要、ローンポートフォリオの返済の鈍化及び逆イールドカーブを認識していた。なお、取締役会資料のグラフは 2022 年の金利上昇が前例のないものだったことを示していた（図表 4）。

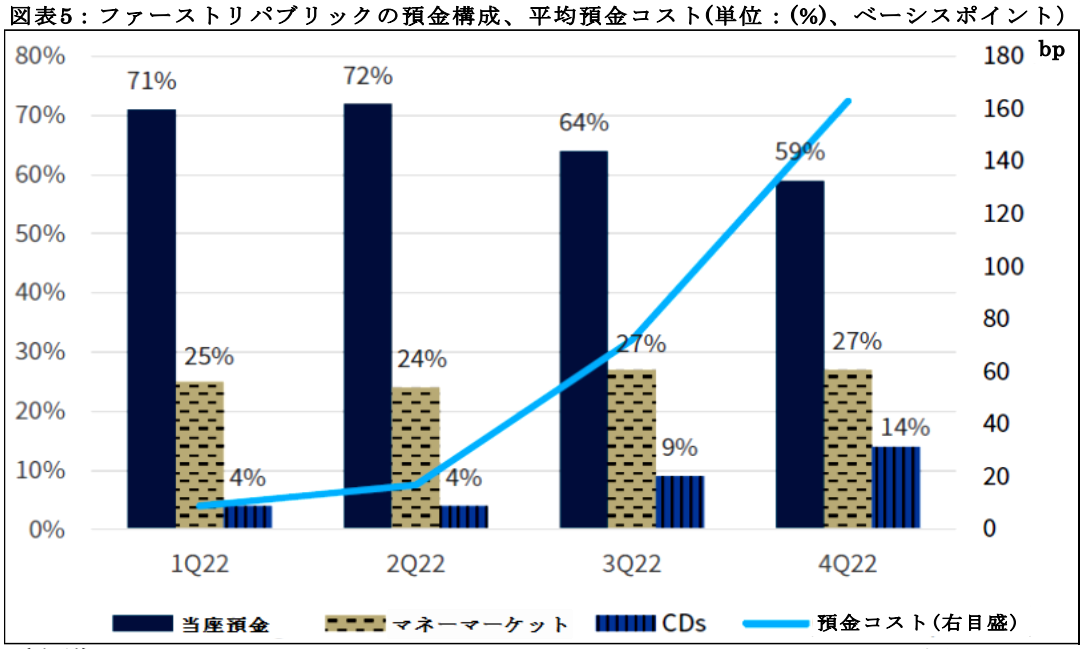
図表4：ファーストリパブリックの取締役会向け資料（金利サイクルに関するグラフ）



〔出所〕FDIC:"FDIC’s Supervision of First Republic Bank", September 2023, Figure3（2023年2月取締役会のプレゼンテーション資料）

CD の対総預金比率が 4%から 14%になり、平均預金コストは 9 から 163 ベーシスポイントに上昇、2022 年に総預金は 12.9%増えたが決済預金は 83 億ドル減少した（図表 5）。

図表5：ファーストリパブリックの預金構成、平均預金コスト(単位：(%)、ベーシスポイント)



〔出所〕FDIC："FDIC's Supervision of First Republic Bank", September 2023, Figure4より

加えて、金利上昇でファーストリパブリックの証券と貸出の公正価値が減少し、評価損が発生（図表 6)、これは財務諸表の注記で開示されていた。2022 年末に貸出の未実現損失は 220 億ドルに達した。SVB が破綻した要因には証券の未実現損失が資本を上回ったことがあったため、同行の未実現損失も注目を集めた。公正価値減少と高水準の保険対象外預金が、預金者や公衆がファーストリパブリックを SVB に類似するとみなした理由だった。

図表6：ファーストリパブリックの公正価値でみた評価損（単位：百万ドル）

単位：百万ドル	償却原価または帳簿価額	公正価値	未実現純損益または公正価値の減少
2022年12月末時点			
売却可能負債性証券	3,817	3,347	-470
満期保有負債性証券	23,348	23,587	-4761
貸出（貸倒引当金控除後）	166,084	143,925	-22159
2021年12月末時点			
売却可能負債性証券	3,425	3,381	-44
満期保有負債性証券	22,292	23,422	1130
貸出（貸倒引当金控除後）	134,262	129,262	-4993

〔出所〕FDIC："FDIC's Supervision of First Republic Bank", September 2023, Table2より

Ⅲ．ファーストリパブリックの金利リスクモニタリング

1．金利リスクモニタリングの枠組みと運営状況

ファーストリパブリックの金利リスク管理方針によれば、CFO が金利リスクを所管し、ALM 委員会は金利リスクをモニタリングし、リスクアペタイトステートメントで定義された閾値の抵触をトレジャリー・リスクオフィサーに上申する責任がある。トレジャリー・リスクオフィサーは、エンタープライズリスク管理委員会（BERM）か取締役会のエンタープライズリスク管理委員会（DERM）への報告を決める。BERM は DERM への報告関係にあり、少なくとも四半期毎に金利リスク情報を検討して閾値への抵触を報告する。DERM

は取締役会から委任された権限に基づいてリスクリミットを承認し、金利リスク情報を四半期毎に評価し、重大な金利リスク事項を取締役会に報告する。

同行は、成長を仮定した動的な NII モデル分析と成長を仮定しない静的な EVE 分析を行って、四半期毎に ALM 委員会、BERM、DERM 及び最終的には取締役会に報告していた。2022 年中の NII 分析は金利上昇シナリオでの NII 減少を示していたが、同行のリスクトレランス／リスクアペタイト閾値の範囲内だった（図表 7）。だが、EVE 予想では、100bp から 400bp の範囲での金利上昇を想定すると、2022 年第 2 四半期の 100bp 上昇シナリオの場合を除くと純資産は閾値以上に減少することが示されていた。

図表7：ファーストリパブリックの資金利益シミュレーション（単位：(%)、10億ドル）

シナリオ	2022年9月―ショック1年目		2022年12月―ショック1年目		リスクトレランス／アペタイト
	変化率	資金利益額	変化率	資金利益額	
＋400bp	1.99%	5,231	-12.47%	4,033	+/-25/30
＋300bp	1.89%	5,226	-9.10%	4,189	+/-20/25
＋200bp	1.70%	5,216	-6.03%	4,330	+/-15/20
＋100bp	1.46%	5,204	-3.06%	4,467	+/-10/15
ベースの資金利益		5,129		4,608	

〔出所〕FDIC："FDIC's Supervision of First Republic Bank", September 2023, Table3より

ALM 委員会は 2022 年 8 月に抵触について検討し、金利上昇と資金調達のデュレーション短期化が続くとの想定では、EVE のリスク特性はライアビリティセンシティブであり短期的にはさらに悪化するとしていた。ただし、EVE での抵触に関して追加的な措置は取らないことを全会一致で承認していた。BERM は 8 月に抵触を検討し、DERM と取締役会は 9 月に検討した。議事録によれば BERM、DERM と取締役会は、追加措置は取らずにモニタリングを続けるという ALM 委員会の決定に同意していた。

ファーストリパブリックは、2022 年の第 3、第 4 四半期に、より大きな EVE 予想の抵触を認識した。EVE 予想では、純資産の市場価値の大幅な減少及び金利が上昇した場合には銀行の純資産の価値がさらに減少してマイナスになる場合があることを示していた。例えば、2022 年 12 月の EVE 分析では、200bp の金利上昇は純資産の経済価値を 117%減らし、純資産はマイナスになるという結果だった。（図表 8）

図表8：ファーストリパブリックのEVE（純資産の経済価値）変化予想

時期（四半期末）	純資産の時価評価（百万ドル）	シナリオ			
		＋100bp	＋200bp	＋300bp	＋400bp
2022年3月	16,715	-5%	-12%	-20%	-29%
2022年6月	13,588	-16%	-33%	-50%	-66%
2022年9月	8,103	-41%	-82%	-120%	-156%
2022年12月	6,928	-59%	-117%	-172%	-224%
リスクトレランス／アペタイト		15/20%	20/25%	25/30%	30/35%

〔出所〕FDIC："FDIC's Supervision of First Republic Bank", September 2023, Table4より

ALM 委員会は 9 月の EVE の抵触を 10 月に検討し追加的な措置を取らないことを、再度、全会一致で承認した。BERM、DERM と取締役会は 11 月に検討し、この決定に同意した。12 月の抵触は 2023 年 3 月に ALM 委員会、BERM、DERM と取締役会に提出されたが、ファーストリパブリックの破綻前には議事録は最終化されていなかった。

2023 年 2 月 1 日付の取締役会向け金利リスク・サマリーメモ（2022 年 12 月 31 日時点）は、以下を指摘していた。

・12 月 31 日時点の EVE 分析は、かなりのライアビリティセンシティブな EVE ポジションを示した。負債のデュレーション短期化で 9 月末時点よりライアビリティセンシティビティがさらに増えた。これは主に、有利子預金と短期ホールセール資金調達が増え、無利子決済口座の残高が減少したためである。 ・純資産の経済価値は 69 億ドルと推定され、9 月末の 81 億ドルより低い。金利の 2%のパラレルショックがあると、純資産の経済価値はマイナス 116.9%変化し（81 億ドルの減少）経済価値はマイナスになる。

FDIC によれば、2022 年中には金利の上昇によって EVE モデルでの減少を経験した銀行は稀ではなかったが、ファーストリパブリックの EVE 減少の程度は他の大手金融機関での減少よりかなり大きかった。FDIC の当局者は、ファーストリパブリックの対応についての切迫感のなさを懸念していた。

2. 金利リスク削減の選択肢の可能性

ファーストリパブリックは、金利リスクの削減で十分な行動を取っていなかったが、その規模、複雑さ、リスク特性の銀行としては追加の措置を積極的に取るべきだった。レビューでの我々インタビューで FDIC 当局者は、リスク削減の可能性をいくつか提案している（下記参照）。ただし、同行のビジネスモデル、規模、資産と資金調達の集中は、これらの実行可能性を難しいものにしただろう。

・資産のデュレーション削減：より積極的なローン金利設定と提供するローン商品の変更（長期固定金利ローンの停止など）。
・資本増強：同行は市場との結びつき維持のため資本調達を定期的に表明し、2023 年 2 月に 3 億 9 千 7 百万ドルを調達した。だが、SVB 破綻後は貸出の未実現損失が話題にされた。混乱の前に資本水準を高めていれば、預金者と投資家の不安は少なかっただろう。
・ヘッジ活動：FDIC の検査官によれば、過度に複雑な戦略や取引は行わないという哲学と整合的に、同行はヘッジ活動を行っていなかった。ヘッジの必要性が明白になったときには、商業的に合理的な条件での利用はできなかった。
・ローン売却：金利上昇前にローンを売却していれば未実現損失は減らせた。2021 年から

2022 年第 1 四半期に 85 百万ドルのローンを売却したが 2022 年中の売却はなかった。なお、戸建て住宅ローンは金利が低すぎ、証券化すれば損失が生じたとみられる。最後に証券化を行ったのは 2020 年だった。

複数の FDIC 当局者は、ファーストリパブリックがより効果的な戦略を構築すべきだったとしている。同行の ALM 委員会は、2020 年 6 月のバランスシートに基づいて“金利リスク”と題した資料を作成、経営陣と取締役会にバランスシートのイグジット戦略の必要性、過去の金利上昇事例（テーパータントラム）、アセットセンシティビティの効果とコスト、NII で資産の成長を前提することの影響（リスクの過小評価）、低金利の決済性資金の有利子商品などへの移動の影響、を検討すべきだとしていた。いくつかの点は 2022 年に実現されたが、注意深く計画されたイグジット戦略はなかった。

3. SVB と SBNY での大幅な預金流出が伝播

SVB の破綻の影響は、既存のメディアやソーシャルメディア、空売り業者などにより、類似のリスク特性、特に、高水準の保険対象外預金、顧客の集中、高水準の未実現損失などがあるとみられる他の銀行へと広まった。波及効果は、当初は株価の大幅下落や預金の流出として現れた。ファーストリパブリックの預金流出はやがて預金取付けとなり、克服が困難な弱点が露わになった。SVB には証券の未実現損失があったが、ファーストリパブリックではローンの公正価値と償却原価または簿価との差がかなりあった。

SVB からの預金取付けが始まった 3 月 9 日にはファーストリパブリックに預金がかなり流入したのだが、SVB が破綻した 10 日以降は逆転し始めた。保険対象外預金の多い地銀に波及が広がり、ファーストリパブリックから大幅な預金流出が起きた。株価は日中に 50%以上下落し取引はしばしば中断した。預金流出は約 250 億ドル（総預金の約 17%）に達し、かなりの FHLB と FRB のラインの使用が必要になった。12 日（日）には FRB の窓口貸出から追加の流動性を受入れた。

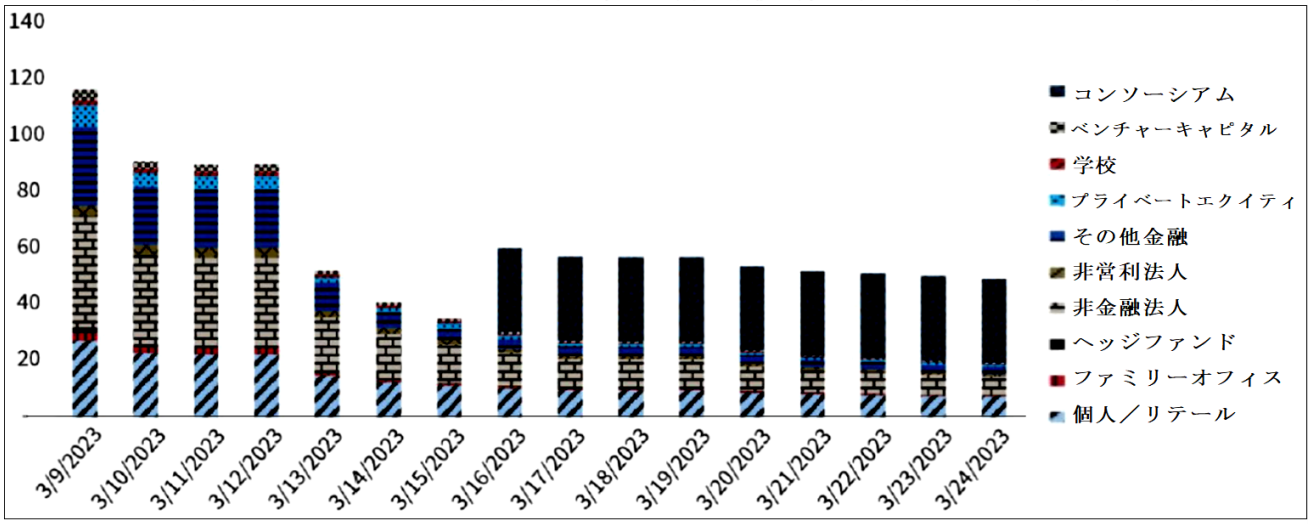
13 日（月）に株価はさらに 62%下落、預金の流出は約 400 億ドルになり、速度はやや鈍化したが流出はその後も続いた。同行は 15 日に資本調達とバランスシートとビジネスモデル再構築の作業を外部企業と開始し、16 日に大手米銀 11 行のコンソーシアムが同行に 300 億ドルの預金を行った。預金の流出は 24 日までの週に鈍化しその後は安定化した（図表 9）。この間の預金流出額は 960 億ドルだった。

ファーストリパブリックは 3 月 20 日に、7 つ主要な目標を含む長期的な安定性回復のための Go-Forward Plan を策定し取締役会で承認されて規制当局と共有された。

7 項目は、①FRB からの借入と銀行コンソーシアムの預金の返済、②外部資本を追加調達して資本ポジションをさらに強化、③バランスシートの規模を縮小、④雇用者と支出の削減で業務運営の規模を適正化、⑤預金のリレーションシップを再構築、⑥ローン組成活動を改革、⑦リスク管理プログラム、特に流動性と金利リスクの改善、である。

計画には財務予測も含まれていた。FDIC の問題銀行メモ（3 月末）は、計画は同行の構造、ビジネスモデル、業務運営の大幅な変更を示し、市場のボラティリティや公衆の認識が緊迫したものであるのを考慮すると、かなりの執行リスクがあるとしていた。

図表9：ファーストリパブリックの保険対象外預金残高の推移（預金者の業態別：単位（10億ドル））



〔出所〕FDIC:"FDIC's Supervision of First Republic Bank", September 2023, Figure5より

同行は 4 月 24 日に第 1 四半期決算を公表したが、預金の大幅な喪失が市場のネガティブな反応を招き、株価下落と 100 億ドル以上の預金流出が生じた。FDIC も計画の主要要素が実施されていないことに留意した。さらなる状況悪化を踏まえて FDIC とカリフォルニア州当局は 4 月 28 日に評価を引下げ FRB からの借入れの条件が厳しくなった。5 月 1 日に同行は FDIC の公的管理下になり JP モルガンチェースが預金と資産を買収した。

Ⅳ．ファーストリパブリックの検査、監督（1）～CAMEL 格付け、市場リスクへの感応性

1．ファーストリパブリックの CAMEL 格付け、検査勧告

FDIC による監督活動は、監督計画、ターゲット検査、継続モニタリング、年次検査報告書を含む CEP（継続続的な検査プロセス／プログラム）に基づいて行われ、検査は専担チームが任命されて州当局と協働で実施された。

ファーストリパブリックの CAMEL 格付けは良好で、改善すべき点は少なかった（図表 10）。2018 年から 2023 年 5 月に 54 件のターゲット検査の監督レター、4 件の年次検査報告書が発行されていた。だが、2023 年 3 月末に暫定評価が引下げられ、4 月 28 日に更なる引下げが通知された（(CAMEL 評価 434455／総合格付け 5)。

図表10：ファーストリパブリックの安全性・健全性検査結果

格付け：総合と各要素	2018年	2019年	2020年	2021年	2022年*
総合格付け	2	2	2	2	3
自己資本	2	2	2	2	3
資産内容	1	1	1	1	2
経営	1	1	1	1	3
収益性	2	2	2	2	3
流動性	2	2	2	1	4
市場リスクへの感応性	2	2	2	2	4
検査の時点 ROEの発行日付	18年末 2019年5月13日	19年末 2020年5月7日	20年末 2021年5月6日	21年末 2022年5月4日	22年末 *暫定

〔出所〕FDIC："FDIC's Supervision of First Republic Bank", September 2023, Table4と報告書の記述から筆者作成。
*2023年3月末時点の暫定的な格付け(なお、4月28日にさらに引下げ総合格付けは5とされた）。

FDIC の SFRO（サンフランシスコ地域事務所）によれば、検査勧告（図表 11 参照）に対するファーストリパブリックの反応は迅速で、タイムリーに是正措置を実施していた。なお、FDIC の勧告には重要性が高く取締役会と経営陣の対応が求められるもの（MRBA 勧告）があるが、ファーストリパブリックに対する MRBA は、Go-Forward Plan 実施に関連したものが 2023 年 3 月末に評価引下げメモの一部として伝えられただけだった。

図表11：ファーストリパブリックの検査勧告の推移

検査サイクル	検査勧告			新規の検査勧告
	新規	完了	未了	対象分野
2018年	9	3	6	・ドッドフランク法ストレステスト（MRM）（2） ・オペレーショナルリスクービジネスプロセス管理と情報セキュリティプログラム（2） ・市場及び資金調達リスク—流動性ストレステスト（LST）（4）及び流動性報告
2019年	1	7	0	・預金の安定性—LST
2020年	2	1	1	・ストレステスト—自己資本ストレステスト（CST） ・商業不動産—貸出分析ワークシート
2021年	2	1	2	・ストレステスト—預金流出カリブレーションモデル ・担保付商業貸出—パンデミックの影響を受けた借手のリスク評価
2022年	2	2	2	・市場及び資金調達リスク—MRM（2）
合計	16	14	2	

〔出所〕FDIC："FDIC's Supervision of First Republic Bank", September 2023, Table4より。MRM：モデルリスク管理、LST：流動性ストレステスト、CST：自己資本ストレステスト

FDIC は、市場リスクへの感応性を 2018 年以降の年次検査報告書で 2 と評価し、これは管理の適切さを示していた。2018 年から 2021 年の年次検査報告書は、①市場リスクへの感応性は適度で、金利リスク管理プログラムは適切、②着実な資産の成長と価格（金利）変更、これに対応する低コスト預金増加が同行の安定的な金利リスク特性の鍵である、③金利リスクシミュレーション分析は、ありそうなシナリオで収益と資本への低～中程度の影響を示し金利リスクシミュレーションの結果はリスクリミット内、と評価していた。

また、2020 年の年次検査報告書では、経営陣は全ての潜在的な金利シナリオの影響を強く意識していて、パンデミックの間に状況変化に対する柔軟性を明確に示したとし、金利リ

スク管理プログラムも評価していた。また、フラットな長期金利の予想に資産と負債のデュレーションを延ばして対応し、2021 年のどこかでの安定化も検討していたとしていた。

2022 年の監督計画では“バランスシートは資産と負債の調和のとれたデュレーションを示す。富裕層顧客と関連事業での競争は激しく、経営陣が預金や貸出の価格設定を通じて金利リスクを管理する際の課題になる。堅固な成長は資産と負債の迅速な価格変更により変化する金利環境の下で相対的に安定した NIM（純金利鞘）に長く寄与してきた。成長の継続的鈍化は資産と負債のミスマッチを引き起こし NIM に悪影響しかねない”としていた。

2023 年の監督計画（2022 年 9 月発行）は、流動性管理ツールと金利リスクの外れ値は高いリスクを示し、継続モニタリングと市場・資金調達リスクターゲット検査を通じた高リスク分野の徹底的な評価で焦点を合わせたモニタリングの必要性を反映するとした。記述が強まった要因には対資産で高い保険対象外預金比率と資産デュレーション増加があった。

同行はリスクトレランスとリスクアペタイトへの抵触を 2022 年第 2 四半期の EVE 予想で認識し始めた。専担検査チームは 8 月にこの抵触に気づき、11 月に受領した取締役会議事録で同行が対応策を取らず状況を監視すると決めたことを知った。11 月には第 3 四半期のより厳しい抵触に気づき、2023 年 2 月に受領した取締役会議事録で、同行が再度、対応策を取らず状況を監視すると決めたことを知った。FDIC 当局者の説明によれば、ALM 委員会の EVE に関する情報は、複数のリスク管理委員会を経て取締役会に提示されるため、専担チームは、抵触発生から数か月たってからしか取締役会の反応を受け取れなかった。

FDIC は LIDI（大手預金保険対象機関）に対する報告書を四半期毎に作成している（詳細は後述）。ファーストリパブリックの 2022 年第 2 四半期報告書（10 月発行）では EVE の抵触を検討していなかったが、EVE リスクが安定的から増加に変化したとは指摘していた。第 3 四半期報告書（2023 年 1 月発行）で抵触に言及し、第 1 線の担当者が金利リスク戦略の変更を検討せず、ERM チームも監視継続を決めたと指摘、ALM 委員会に上申されて BERM と取締役会に提示されたことも指摘した。専担チームは、2022 年検査報告書（2023 年 5 月の発行予定）で市場リスクに対する感応性の評価を引下げることを計画していたが、報告書が完成して発行される前にファーストリパブリックは破綻に至った。

2.　FDIC による“市場リスクへの感応性”要素の評価

ファーストリパブリックの金利リスク削減戦略は、継続的な成長と貸出の現行金利での金利改訂に依存してきた。監督計画は潜在的な金利リスクへの言及は限定的で、検査報告書は同行の戦略が金利リスク削減の鍵だと繰返していた。パンデミック前の 3 年間を除くと FRB が 2022 年に利上げを始めるまで金利は極めて低い水準が続いていた。当初 FRB は、

インフレは過渡的だとしていたが、根強いことが分かると金利見通しを引き上げていった。

図表12：FF実効レートの推移、2008年～2023年6月（単位：(%)）

〔出所〕FDIC："FDIC's Supervision of First Republic Bank", September 2023, Figure6より

2021 年末時点では FOMC の 2022 年 FF 金利見通しの中央値は 0.9%だったが、その後は引き上げが続いた。2022 年中の実際の利上げは 425bp～450bp 近くになった。利上げは急速なものだった（下記の参考図表（筆者作成）を参照）。

参考図表：FOMC参加者の経済見通し－ 2022年の予測(単位：(%))

	2021年6月16日		2021年9月22日		2021年12月15日		2022年3月16日		2022年6月15日		2022年9月21日		2022年12月14日	
	2022		2022		2022		2022		2022		2022		2022	
	中央値	範囲	中央値	範囲	中央値	範囲	中央値	範囲	中央値	範囲	中央値	範囲	中央値	範囲
実質GDP成長率	3.3	2.6-4.2	3.8	3.1-4.9	4.0	3.2–4.6	2.8	2.1–3.3	1.7	1.0–2.0	0.2	0.0–0.5	0.5	0.2–0.5
失業率	3.8	3.2-4.2	3.8	3.0-4.0	3.5	3.0–4.0	3.5	3.1–4.0	3.7	3.2–4.0	3.8	3.7–4.0	3.7	3.7–3.9
PCEインフレ率	2.1	1.6-2.5	2.2	1.7-3.0	2.6	2.0–3.2	4.3	3.7–5.5	5.2	4.8–6.2	5.4	5.0–6.2	5.6	5.5–5.9
コアPCEインフレ率	2.1	1.7-2.5	2.3	1.9-2.8	2.7	2.4–3.2	4.1	3.6–4.5	4.3	4.1–5.0	4.5	4.3–4.8	4.8	4.6–5.0
FFレート	0.1	0.1-0.6	0.3	0.1-0.6	0.9	0.4–1.1	1.9	1.4–3.1	3.4	3.1–3.9	4.4	3.9–4.6	4.4	4.4

〔出所〕FRB公表のFOMC資料："Summary of Economic Projections"より筆者作成

レビューチームは、FDIC のリスク管理監督部門（RMS）は、金利上昇の影響についてよりフォワードルッキングであり得たかもしれないと結論づけた。RMS は、より効果的に銀行経営陣に金利リスク管理の戦略実施や変更を提起し促せたかもしれない。

ファーストリパブリックの EVE リスク特性は 2021 年から悪化し始め、＋300bp シナリオでは LIDI プログラムに属する他行と比べてかなり劣っていた（図表 13）。2022 年第 1 四半期の ALM 委員会の資料では純資産の 20%減少が予想され、資産のデュレーション長期化によりエクイティのデュレーションはライアビリティセンシティブに転換していた。

図表13：ファーストリパブリックの純資産の経済価値変化と他行（LIDI-大手預金機関）の比較

	4Q20	1Q21/修正	2Q21	3Q21	4Q21	1Q22	2Q22	3Q22
＋300bpシナリオ	14%	9%/-19%	-20%	-17%	-11%	-20%	-50%	-120%
＋300bpLIDI中央値	7%	4%	3%	5%	2%	-2%	-4%	-6%

〔出所〕FDIC："FDIC's Supervision of First Republic Bank", September 2023, Table6より

レビューチームは、リスク管理監督部門（RMS）は、2022 年 8 月に第 2 四半期の EVE の結果が取締役会の承認した値を大きく越えたと知ったとき及び 11 月に取締役会が抵触の

リスクを受入れたと知ったときにより緊急な監督上の対応を行えたと結論付けた。2022 年 9 月実施の市場と資金調達のターゲット検査では、EVE の抵触や金利リスクの懸念に触れていなかった。なお、専担チームは EVE 抵触への対処を計画し、検査報告書で市場リスクへの感応性の評価を下げようとはしていた。FDIC のシグネチャーバンクの監督のレビューでは、RMS が検査プロセスを継続的に評価し続け必要な変更を行うことを提言している。

V．ファーストリパブリックの検査、監督（2）～流動性リスク管理、経営の評価

1．FDIC による“流動性”要素の評価

2018 年から 2020 年までの検査報告書の流動性の評価は 2 だったが、2022 年 5 月発行の 2021 年検査報告書では 1 に引上げられ、その後、2023 年 3 月末に 4、4 月 28 日には 5 に引下げられた。2018 年から 2020 年の検査報告書は、流動性水準と資金管理実務は満足な状態を維持し、適切な水準の HQLA（適格流動資産）の保有、豊富な未使用の借入能力と効果的な流動性リスク管理ツールを含む様々な要素が流動性リスクを削減したとしていた。

同行は 2020 年と 2021 年に記録的な預金増加を経験し RMS は流動性評価の 1 への引上に同意した。年次検査報告書では、流動性水準は強靭で資金管理実務は成熟し、流動性管理枠組みに効果的に統合されていると結論していた。ただし、専担チームは 2022 年第 3 四半期の継続モニタリング報告書（OMR）で、金利上昇による資金調達コストの増加のため流動性の評価の 12 か月予測をネガティブに引下げていた。第 4 四半期の OMR はネガティブな見直しを維持し年次検査報告書で評価引下げを検討するとしていた。

RMS の監督計画では、ファーストリパブリックの保険対象外預金の集中を主要なリスクと特定し、2020 年の計画では多くの富裕層顧客が大口預金を保有するため、預金ベースのかなりが保険対象外で不安定になりうるとしていた。だが、同行の保険対象外預金の集中は従前と同様であり様々なリスク削減措置と今までの預金の安定性を踏まえれば過度なリスクにはならないとした。その後、2023 年の監督計画では、保険対象外預金の対総資産比率の高さで同行は“高い”リスクがあると流動性モニタリングツールで特定されたとした。

資金調達の保険対象外預金への集中は認識されていたが、検査報告書では経営陣が効果的に預金の安定性を監視し、リスク軽減のため大口預金者との顧客関係開発に注力し、複数のサービス提供で預金口座の移動性を減らしたとされていた。2021 年検査報告書によれば、上位 1%顧客（残高 66 百万ドル超）は 2,900 の顧客関係で、保険対象外預金は約 7,330 億ドル、平均口座保有期間は 8 年、24 サービスが提供され、59%が貸出取引かプライベートウェルスマネジメント口座があった。結論として、預金ベースは企業と家計に多様化され顧客関係では多くの商品とサービスが提供され、機関投資家預金への依存は最小限で、決済口座の比率が高い。潜在的な流動性リスクは適切に監視し管理されているとしていた。

2021 年のストレステスト監督レターは 2021 年検査報告書の結論を支持したが、預金流出カリブレーションモデルへの懸念を認識していた。モデル変更でパンデミック中の約 190 億ドルの預金流入が短期預金から長期預金に再分類されたため、流動性ストレステスト（LST）での各期間の預金流出額が 170 億ドル（総資産の 12%）近く減ったと推定された。この変更がなければ、2020 年第 4 四半期中に質的リスクアペタイトに抵触していただろう。FDIC は検査勧告を行い、2021 年の検査報告書が発行されたときには未解消だった。

レビューチームは、RMS の流動性の評価の 1 への引上げは寛大過ぎ、資金調達の集中及び監督計画で潜在的に不安定とされていたファーストリパブリックの高水準の保険対象外預金と矛盾するものだったとしている。RMS は保険対象外預金の過去の減少率は検討していたが、過去の減少は SVB の破綻の影響による預金流出の有効な予測因子ではなかった。

SVB の破綻後の預金流出の速さは前例がなく規制当局にも銀行にも予想外だった。流動性ストレステストは行われていたが、1 日で 400 億ドルの流出は予期されていなかった。後知恵で言えば、保険対象外預金の大規模な集中がソーシャルメディアに刺激されて流動性イベントを引き起こすリスクを十分に評価してはいなかった。ある RMS 当局者は、2022 年の金利環境と 2023 年の保険対象外預金の不安定性はファーストリパブリックにとってはパラダイムシフトで、預金の粘着性を高める戦略が当てはまらなくなったとしている。

なお、シグネチャーバンクの監督についてのレビューでは、FDIC は保険対象外預金での調達に過度に依存しているか、保険対象外預金が集中している銀行に関する検査ガイドを強化する必要があると提言した。RMS は、ファーストリパブリックの監督での経験を、検査ガイド強化の必要性の評価で考慮すべきである。

2. FDIC による“経営”要素の評価

2018 年から 2021 年の検査報告書は、取締役会の監督、経営陣の成果及び全般的なガバナンスを強固だとして経営要素の格付けを 1 としていた。その後、2023 年 3 月末に 3 に、4 月 28 日には 4 に引下げることになった。各検査報告書は、発達したリスク管理インフラ、内部監査と統制機能だけでなく、長期の安定的な財務パフォーマンスに言及している。コーポレートガバナンスは効果的で、ERM プログラムは、効果的にリスクを特定、監視、優先順位付けし、内部監査プログラムは業務活動とリスク特性に適切なものだとしていた。

なお、同行では 2022 年の初期に首脳陣の変更があったが、専担チームはこれを緊密にモニタリングしていた。2021 年 7 月に創設者（会長、CEO）との契約を延長し、プレジデントが Co-CEO に就任、11 月に CEO 選定臨時委員会が設立された。12 月に会長/Co-CEO の医療休暇を公表し（1 月から 6 か月の予定）、CFO がプレジデントに任命された（1 月から）。

プレジデント/Co-CEO が退任（12 月末）し、新任プレジデントが暫定 Co-CEO 就任した。1 月には EVP/COO が個人的な理由で急に辞任し、3 月に会長/Co-CEO の復帰が公表された。ただし、会長への専念に変更されてプレジデントが CEO 就任することになった。2021 年の検査報告書は、取締役会の行動が銀行の経営を成功裏に安定させたとしていた。

レビューチームは、同行の金利リスク管理と潜在的に不安定な保険対象外預金への依存へのより強い批判は、2021 年の検査報告書で経営の格付けの引下げを促しただろうとしている。また、専担チームも同行の経営者変更を踏まえて格付けの妥当性を検討していた。継続的な成長戦略が不確実な金利環境へと向かっていること及び保険対象外預金への高い依存に伴うリスクを追加的に検討していれば、経営の格付け引下げが選択されただろう。引下げか検査勧告は、同行の経営陣がリスク削減行動を起こすように促したかもしれない。

検査官が、同行の経営は強固で良好なトラックレコードと管理体制があり、フィードバックへの対応は迅速だったと判断していたため、専担チームは同行の経営を信頼し、その戦略と前提を受け入れていた。後知恵では、経営陣に異議を唱える機会がもっとあっただろう。また、同行に対する監督をもっと包括的に行う機会もあっただろう。

SFRO（サンフランシスコ地域事務所）は、CEP（継続的検査プロセス／プログラム）に基づいて監督し、RMS（リスク管理監督部門）が大手銀行の専門家を選任、また、RMS 本部の上級職員が EIC(主任検査官)から定期的に説明を受けて、同行の CEO と四半期毎に面談していた。だが、レビューチームのインタビューと文書のレビューによれば、EIC、専担チームなどへの過度の依存があった。同行のような規模の銀行では、RMS は大手銀行検査部門（LBS）と本部の指導者層が、より支援の機会を持つように検討すべきだった。

同行のビジネスモデルは、LBS と RMS 本部の指導者層によく知られていたので、本部は、十分な金利リスク管理戦略がないことへの疑問を呈すことができただろう。LBS には、LIDI プログラム対象の全銀行について EVE 推定などを含む財務と状況の情報があり、これは各地域事務所と専担検査チームに有用な情報だっただろう。また、専担チームは CEP の各ステップの完了に注力し、リスク状況の変化を十分に観察することや大きな絵柄を明確に見ることができなかったかもしれない。LBS は年次監督計画と四半期毎の LIDI 報告書をレビューしコメントしているが、同行のような規模の銀行では、経済や銀行の環境が即時に変化することを踏まえ、検査の焦点に関してより頻繁な本部との交流が適切だろう。

2022 年 5 月に RMS は、FDIC が監督する大手銀行の継続的な成長と複雑化に対処するために大手銀行運営委員会（LBOC）を設立した。LBOC は、CEP での監督上の優先順位、所見と方針に関する問題での対話の促進を含め、CEP の監視でワシントンと各地域事務所

を調整することを意図していた。RMS は、LBOC がより効果的な交流と対話を増やすような変更を行った。LBOC は最大手 FRB 非加盟銀行の監督についての協調、包括的なアプローチのためのフォーラムを提供できるだろう。各地域は、こうした情報を得ることを進んで受け入れ、効果的に説明を求められてフィードバックに基づいて行動する必要がある。

3. LIDI プログラムでのファーストリパブリックの格付け

LIDI プログラムは、総資産 100 億ドル以上の保険対象預金機関のリスク特性について包括的な分析を提供するように設計されている。タイムリーかつ徹底的な分析は、①預金保険ファンド（DIF）への最大のリスクを特定し、監視し、管理する、②預金保険プレミアム評価の裁量的な調整を支援する、③銀行業界の新たなリスクとトレンドを特定する、④リスクを文書化し FDIC の上級経営陣に伝達する、という点で FDIC を支えている。

地域ケースマネージャーが、四半期毎に LIDI プログラムの報告書を準備する。LIDI 格付けは、DIF への潜在的なリスク（A：低リスク～E：とても高いリスク）を反映するように設計されストレス状況を仮定した破綻リスク評価と破綻を仮定した FDIC の損失が組入れられ、現状で利用可能な情報に基づく 12 か月間の格付け“見通し”も含んでいる。

2018 年から 2022 年の LIDI 格付けと見通しは図表 14 の通りで、2020 年まで格付けは C（ストレス状況では DIF に高まったリスクを及ぼす）とされた。2021 年第 1 四半期に格付けが B（ストレス状況で中程度のリスク）に変更されたが、2022 年第 2 四半期に LBS がケースマネージャーに見通しの引下げを勧告して見通しが引下げられ、第 3 四半期に LBS が格付け引下げを勧告して格付け C、見通しはネガティブになった。

2022 年第 4 四半期についてケースマネージャーは、2023 年 3 月のイベントを踏まえて格付けを D（DIF へのより高いリスク）、見通しをネガティブとした。RMS 当局者は、LBS と専担チームとの間に意見の相違はなかったと示唆している。

図表14：ファーストリパブリックのLIDI格付けと格付けの見通し

時期（年、四半期）	格付けと見通し
2018年1Q～2019年3Q	C安定
2019年4Q	Cポジティブ
2020年1Q～3Q	C安定
2020年4Q	Cポジティブ
2021年1Q～2022年1Q	B安定
2022年2Q	Bネガティブ
2022年3Q	Cネガティブ
2022年4Q	Dネガティブ

〔出所〕FDIC："FDIC's Supervision of First Republic Bank", September 2023, Table6より。2022年4Qの格付けは2023年3月10日の事象を反映。

Ⅵ. 継続的な検査プロセス、計画と成果物、結果の伝達、人員の確保状況

FDIC による銀行の検査・監督は、CEP（継続的な検査プロセス／プログラム）に基づいて行われ、検査計画、ターゲット検査、継続モニタリング、LIDI 報告及び年次検査報告書などの要素が含まれる。

FDIC の“大手銀行監督手順”が CEP 活動の指針を提供する。CEP では専担チームは、EIC（主任検査官）に率いられ、専担チームの規模、構成は、銀行の規模、複雑さ及びリスク特性に基づく。チームの人員配置はフィールドオフィス監督者の責任で、必要なら追加の人的資源を任命する。各地域事務所は、銀行の主なリスク管理窓口となるケースマネージャーも任命する。フィールドオフィス監督者とケースマネージャーは、複数の銀行を所管する地域副責任者（Assistant Regional Director : ARD）の管理下にある。また、LBS 部門が全国的な監視と CEP 対象金融機関の重要な検査活動の品質管理を行う。

監督プロセスの最初のステップは年間の監督計画の開発で、優先すべきリスクの特定と必要な資源の効果的な配分のために重要である。EIC が計画を準備してケースマネージャーに送り、ARD がレビュー・承認しレビューとコメントのため LBS のアナリストに送る。EIC はスタッフを提供するフィールド／地域当局者と人的資源確保のため調整する。ターゲット検査の有効な事前計画は、リスクを特定しリスク管理の有効性を評価する包括的な戦略の開発を含むべきで、ターゲット検査は包括的な範囲メモで支えられるべきである。

レビューチームは、ファーストリパブリックの専担チームがリスク評価で決められたターゲット検査と継続モニタリング活動に必要な人員の計画を含む包括的な監督計画を準備し、監督計画では、同行の業務活動と事業戦略に関する主要なリスクを特定していたことを確認している。検査活動の成果物には以下のものがある。

- 検査官結論メモ（各検査官が作成）
- 要約結論メモ（主任検査官が作成、検査終了後 15 日以内）
- ターゲット結論レターまたは監督レター（主任検査官がターゲット検査後に作成し CEO と取締役会に伝達、検査完了ミーティングから 45 日以内）
- 四半期 LIDI 報告書（ケースマネージャーが作成、四半期末から 55 日以内）
- 継続モニタリング報告書、四半期毎の監督上のレター（任意のレターで CEO と取締役会に伝達、四半期末から 60 日以内）
- 監督上のレター（検査勧告の解消や継続モニタリングの結果を CEO と取締役会に伝達）
- 年次検査報告書（検査対象期間から 150 日以内）

通常 SFRO は、ターゲット検査の結果を検査完了ミーティングで同行の経営陣に伝え、監督上のレターで取締役会と経営陣に伝え、文書化した検査報告書を取締役会と経営陣に

伝達していた。また、専担チームは同行の経営陣と四半期毎にミーティングを行っていた。レビュー対象期間中に SFRO は、54 のターゲット検査の監督レターと 4 の検査報告書を発行したが、CEP の中央値との比較では検査報告書はタイムリーに発行されていた。また、ターゲット検査の監督上のレターもの概ねタイムリーだった（ベンチマークは 45 日）。

図表15：検査結報告書（ROE）の適時性（検査対象時点から報告書発行日まで）

検査レポート対象時点	発行日	日数：CEP中央値	First Republic	差異
2018年末	2019年5月13日	168日	133日	-35日
2019年末	2020年5月7日	168日	128日	-40日
2020年末	2021年5月6日	152日	126日	-26日
2021年末	2022年5月4日	167日	124日	-43日

〔出所〕FDIC:"FDIC's Supervision of First Republic Bank", September 2023, Table10より

レビューチームのインタビューで、検査人員確保の適切性について様々な見解が得られた。インタビューした当局者の大半が人員は適切な水準だったとしたが、1 人から専担チームの欠員とターゲット検査で LFI（大手銀行）検査官の任命が少なかった点に懸念が表明された。ただし、当局者の全てが、ターゲット検査がタイムリーに完了され、監督上のレターと検査報告書の発行はタイムリーで検査成果物は高品質だったとしていた。

監督計画ではターゲット検査と継続モニタリングに必要な時間を推定している。実際の検査時間と比較すると図表 16 の通りで、実際の検査時間は計画より短かった。

図表16：計画された検査時間と実際の検査時間

検査サイクル	ファーストリパブリックの総資産	計画された時間	実際の時間	達成率	資産10億ドル当りの計画時間
2018	17年3月末で765億ドル	19,040	17,328	91%	249
2019	18年3月末で902億ドル	21,785	14,198	65%	242
2020	19年3月末で1018億ドル	23,500	21,817	93%	231
2021	20年3月末で1239億ドル	24,424	16,974	69%	197
2022	21年3月末で1558億ドル	20,402	15,367	75%	131

〔出所〕FDIC:"FDIC's Supervision of First Republic Bank", September 2023, Table11より、旅行時間は含まず

同行の一貫性のあるビジネスモデルと特に複雑ではない戸建て住宅ローンに集中した拡大のため、規模の経済が検査時間に影響したかもしれない。だが、4 年間で総資産は 2 倍になったが検査時間は 11%減少しており、これは直観に反し監督計画での説明が求められる。

Ⅶ. 報告書の結論とさらに検討すべき事項

3 月のイベントは前例がないもので、預金者が SVB などから預金を引き揚げた速度は、規制当局にも銀行業界にも予想外で驚くべきことだった。その後、規制各当局は規制の見直しを行っており、FDIC は、預金保険改革の選択肢も検討して報告書を公表している。また、当局は緊張や脆弱性を表した金融機関を注意深く監視している。

レビューチームの報告書は、後知恵で実際に起きた事象とそれが過去の状況とどう異なるのかを完全に理解してすべきだったことを提案するのは容易だとして、FDIC の検査指針

及びリスク管理監督部門がその時点で利用できた情報によって監督活動を評価しようと試みている。報告書は、金利リスクや流動性リスク管理への批判など、より早く監督行動を取っていたらファーストリパブリックの破綻が避けられたか否かはどちらとも言い難いとした上で、金利リスクを削減し資金調達集中に対処していれば、3 月に起きた伝染性のイベントにより抵抗力あり、脆弱性を抑えられただろうと述べている。

4 月に公表された“FDIC によるシグネチャーバンクの監督”報告書は、FDIC が検討すべき事項を明らかにしているが、そのいくつかはファーストリパブリックの破綻にも関連している。これに追加して検討すべき事項を特定して整理すると図表 17 の通りである。

図表17：FDICがさらに検討または調査すべき事項

分野	さらに検討・調査すべき事項
指針	1. CEP（継続的な検査プロセス）での金利リスク管理の評価に関する期待と検査官の資源を再確認する 2. 以前に報告―預金保険対象外の預金での資金調達に過度に依存するか預金保険対象外の預金の集中がある銀行の監督に関して、検査指針を強化する必要性を検討する 3. CEP検査チームが未実現損失と公正価値の下落（証券及び貸出）についてより検討を行い、重きを置くかべきか及びコールレポートで追加の情報分野が必要かを評価する
プロセス	4. 以前に報告―CEP（継続的な検査プロセス）が効率的、効果的でかつ適時性があるリスクに基づく大手銀行へのフィードバック提供することを確実にするためCEPの評価を続け、適切なら暫定的なCAMEL格付けを行うこと含め、必要な変更を実施する 5. 以前に報告―上記の4項の一環として、得られる便益との関連で既存のCEPが求める成果物と成果物の準備のための努力の水準を評価する。プログラムの要件と文書での成果物を簡素化する可能性を探究する 6. LBS（大手銀行監督部）がLIDI（大手保険対象預金機関）の水平的及び傾向的な情報を検査チームに提供し、ベンチマーキングと大手銀行に関する幅広い見方を提供する機会を探求する 7. 大手銀行のレピュテーショナルリスクのプロファイルのリアルタイムでのモニタリングに関して、可能性があるプロセスと情報源を探究する。可能性がある情報源は銀行の株価追跡ウェブサイト、空売りを行う者の活動及びソーシャルメディアでの議論を含むかもしれない 8. 銀行の取締役会の決定に関する情報の受け取りで遅れを経験したかについて他のCEPチームと協議し、決定に関する情報をより迅速に得る代替手段を探究する

〔出所〕FDIC:"FDIC’s Supervision of First Republic Bank", September 2023より

以上でみてきたように、FDIC の内部レビューチームは、ファーストリパブリックが破綻に至った経緯、FDIC による同国の監督・検査の経緯とその枠組みを検討して改善策をまとめている。報告書からは破綻した銀行だけでなく規制・監督当局にとっても、急な金利上昇への対応は難しかったことがうかがわれる。

今後、複数の銀行に共通する脆弱性を分析して必要ならグループとして監視し、検査担当者との情報共有によって問題の発生に備え伝播を抑制することが、米国の銀行監督当局にとって重要な課題だと考えられる。

以上